

萩城（別名指月城）は、毛利氏によって 1604 年に造られた。戦国時代の末期、江戸時代（1603-1867）を通し、萩と長州（今の山口県）の大名であった毛利は西軍を支持し、のちに將軍となった徳川家康に対抗した。1600 年関ヶ原の戦いで家康が勝利したのち、毛利氏は広島から萩へ移封された。当時、萩は日本海に面した未開発の沼地の三角州だった。日本の中心から遠く離れた場所に追いやられてしまったにもかかわらず、政治的な地位を得るために急速に発展した。1874 年に、侍よりの治世の時代が明らかに終わっていたのを見せるために明治政府は萩城を含む他の城を解体した。城郭が解体された後は萩城は公園の敷地内に作られ、2015 年に「明治日本の産業革命遺産」の一部として世界遺産に登録された。

公園にはいくつかの庭園、1878 年に建てられた毛利家の神社、そして 1889 年に移築された茶屋がある。春には、500 本を超える吉野の桜が花見に最適な場所となる。季節の変化を祝い、花を屋外で鑑賞するのが習慣となっている。

萩城はいくつかのエリアから成っている。

- 詰丸、指月山の山頂の小さな要塞
- 本丸、城の中心で生活居住の場所
- 二の丸（庭、寺院、神社を含み、第 2 の防御の砦
- 三の丸、上級武士団の住居と商人の城下町、第 3 の防御の砦。